優秀賞

【社会科】

身近な地域の魅力に気付き、誇りをもつ生徒を育成する社会科授業

上越教育大学附属中学校
仙田 健一（せんだ けんいち）

概　要

本研究では身近な地域の歴史的事象を追究することを通して、身近な地域に魅力や誇りをもつ生徒を育成する社会科授業の単元開発を目的とした。

本単元は中学校学習指導要領社会「歴史的分野　内容A　歴史との対話　(2)身近な地域の歴史」を扱い、「百年商店街絵看板めぐりから高田の歴史を考えよう～高田本町のフィールドワークを通して～」という授業を実践した。

本研究の成果として、一次史料を自らが探し、歴史の本質を見極めていく歴史研究者が歴史を追究していく過程を追体験したことがある。また、老舗商店の関係者に聞いても分からない歴史的な事実が多くあり、歴史が絶対的なものではないことを捉えていた。これは、教科書の内容を批判的に検討したり、深めたりする汎用的な見方・考え方でもある。加えて、老舗商店の人々と対話することを通して、そのような歴史的な事実が残っていること自体に価値があることを理解する生徒の姿があった。

1　研究の目的

社会科では、身近な地域の社会的事象を取り扱うことで地域に対する愛着や誇り、地域の一員としての自覚をもち、地域社会の発展を願う気持ちを育成することが大切である[1]。

一方、中学校社会科で身近な地域と関わらせて学習する場合、少子高齢化、過疎化、産業における課題、歴史的な事件、地方政治に関する課題、SDGsといった社会的論争問題や地域の課題を取り扱うことが多い。身近な地域を取り扱うことは社会的事象を多面的・多角的に考察し、社会認識を深めることに有効である。これに対して、地域への愛着や誇り、地域の一員としての自覚とは直接的に結び付かない。これは地域の課題の背景にある歴史、地理、経済、政治といった事実を知り、深めるほど「自分自身にはどうすることもできない」「身近な地域は課題ばかりで魅力的ではない」といった認識に留まることが多いからである。特に身近な地域の歴史に関しては、教科書で取り上げられている歴史的事象との関連や授業時数の問題から取り扱うことが少なく[2]、歴史の中で生きる自己を実感し「我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚」[3]を育成することができていないのである。

そこで本研究では身近な地域の歴史的事象を追究することを通して、身近な地域の魅力に気付き、誇りをもつ生徒を育成する社会科授業の単元開発を目的とする。

2　授業分析の視点

実践校の生徒へのアンケート（実施日2022年5

月12日）では、身近な地域である「高田本町に魅力を感じるか」について、生徒の85%（93人中79人）が「（とても）感じる」と答えた（表1）。これに対して、「高田本町に課題を感じるか」では、「（とても）感じる」と答えた生徒は65%（94人中61人）である（表2）。「高田本町の課題は自分自身が考えるべき課題であると感じるか」では、「（とても）感じる」と答えた生徒は67%（90人中60人）である（表3）。「高田本町に対して誇りを感じるか」では、「（とても）感じる」と答えた生徒は74%（92人中68人）である（表4）。

表1　高田本町に魅力を感じるか

とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
42%（39）	43%（40）	14%（13）	1%（1）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

表2　高田本町に課題を感じるか

とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
17%（16）	48%（45）	24%（23）	11%（10）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

表3　高田本町の課題は自分自身が考えるべき課題であると感じるか

とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
21%（19）	46%（41）	23%（21）	10%（9）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

表4　高田本町に対して誇りを感じるか

とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
40%（37）	34%（31）	24%（22）	2%（2）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

抽出生徒のアンケートの記述は以下のとおりである（表5）。抽出生徒は「高田本町に魅力を感じるか」について、「あまり感じない」と回答した生徒を抽出している。

表1の項目について、生徒B、生徒C、生徒Eのように高田本町のことを知らないことが「魅力を感じない」理由となっていることが分かる。表2、表3、表4でも高田本町について知らないことが回答と関わっていることが分かる。

これらのアンケート項目への回答が単元全体を通して、「（とても）感じる」に転じることが成

表5　抽出生徒のアンケートに対する回答

	表1　高田本町に魅力を感じるか（理由）	表2　高田本町に課題を感じるか（理由）	表3　高田本町の課題は自分自身が考えるべき課題であると感じるか（理由）	表4　高田本町に対して誇りを感じるか（理由）
生徒A	C：特にこれっていうものや建物がないから	B：高田本町にあんまり魅力を感じないから	B：課題と感じる	C：誇りに思うものがないから
生徒B	C：学校の学習や普段の生活であまり関わったことがないから	C：関わることが少なく分からないから	C：高田本町の課題がはっきりと出せていないから	C：自分の思う魅力や課題がはっきりと出せていないから
生徒C	C：高田本町のことをあまり知らないから	B：課題を感じる	C：課題とあまり感じない	A：誇りをとても感じる
生徒D	C：閉じているお店が多いから	B：閉まっているお店が多いから	C：できればいいところにしたいけど、今の年齢では、お店を再復活できないから	B：なぜかはわからないけど、いいところだなって感じるから？
生徒E	C：本町を知らないから	C：本町を知らないから	C：本町を知らないから	C：本町を知らないから

A：とても感じる　B：感じる　C：あまり感じない　D：感じない

果となる。つまり、地域の課題を認識したとしても、地域に対して魅力や誇りといった価値認識を深めていることが目指す生徒の姿なのである。

3 研究の目的に迫るために

(1) 高田本町の歴史的な特徴を主体的に追究するために

岡田泰孝は「地域社会の問題について実際に決定や提案できる場合ならば、子ども自身が直接的な『当事者』になることができる。子どもたちは論争問題の直接的な『当事者』にならなくても『問題的事象と学習者との距離感』や『心理的・物理的な関係』が近くなり、深まれば『当事者性』をもって、その問題について、判断し決定できる」[4]と述べる。この距離感や関係を近づけるために、歴史的な視点を設定した上でのフィールドワークが効果的である。

そこで絵看板を探し、地図上に記録する調査と絵看板に関わる歴史の調査を生徒自らが計画し、実施する活動を位置付ける。

(2) 高田本町の歴史的な建物や景観の価値に気付くために

唐木清志は「追究すべき課題が教科書の中にあるのではなく、現実社会の中にこそあるという認識は、地域社会の生々しい課題と実際に格闘する中でこそ生まれてくるものであろう」[5]と述べる。このような身近な地域の人への聞き取り調査や施設見学が歴史に対する認識を深めることとなる。

そこで「高田本町百年商店街プロジェクト」に携わる地域の人々と関わったり、まとめたりしたことを発表する場を設定する。

4 単元の構想と指導計画

(1) 単元名

歴史的分野　内容A　歴史との対話

(2)身近な地域の歴史

「百年商店街絵看板めぐりから高田の歴史を考えよう～高田本町のフィールドワークを通して～」

(2) 単元の目標

百年商店街の老舗商店の成り立ちを探究することを通して、老舗商店の歴史を調べたり、収集した情報を年表にまとめたりする技能を身に付け、歴史的な特徴を多面的・多角的に考察することで、高田本町の歴史的な価値を尊重し、主体的に追究しようとする。

(3) 単元の位置付け

『中学校学習指導要領(平成29年告示)』の「身近な地域の歴史」では地域の歴史を調べる中で収集した情報を年表にまとめたり、地域に残る文化財や諸資料を活用したりすることで身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察することとしている。また、そのような活動を通して、「我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚」や「現在に伝わる文化遺産を尊重しようとすることの大切さについての自覚」を深めることが示されている。

一方、博物館等に飾られている文化財に比べて、通学路等にある歴史的な建物や景観については素通り、もしくは知らない生徒が多い。高田本町百年商店街の絵看板も、その一つである。城下町として栄えた高田は創業100年から400年以上の老舗店舗が30以上、軒を連ねる。高田本町では、商店街の活性化を目指す「高田本町百年商店街プロジェクト」として2018年から江戸時代に多くの商店で見られた絵看板を復活させる活動を行っている。

上記のような絵看板のある老舗商店の成り立ちを探究することで高田本町の歴史的な特徴を捉え、学校の所在地である高田への関心を高め、現在に伝わる歴史的な建物や景観の価値に気付き、それらを尊重することの大切さについて自覚を深めさせたい。

(4) 単元の評価基準、指導計画

上記の目標を達成するために単元の評価基準と指導計画を作成した。

① 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
高田本町やそこに受け継がれてきた伝統や文化への関心をもち、絵看板という具体的な事柄との関わりの中で、高田の歴史について調べたり、収集した情報を年表にまとめたりする技能を身に付けている。	高田本町に残る文化財や諸資料を活用し、高田本町の歴史の時代背景や地域的な環境、歴史と私たちのつながりに着目して、高田本町の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察している。	絵看板のある老舗商店の成り立ちを調べることを通して、高田本町の歴史的な価値を尊重し、主体的に追究しようとしている。

② 単元の指導計画（全10時間）

時	目標	主な学習活動	評価の観点		
			知	思	態
1	○高田本町の歴史について知っていることを確認し、自己の学習に見通しをもつことができる。	・「高田本町の歴史について知っていることは何か」を考え、ワークシートに記述する。			記述
2〜3	○高田本町の古絵図や地図から地理的な情報と関連付けて調査ができる。	・高田本町の絵看板を地図上に記録するフィールドワークをする。	白地図		
4	○インターネットや『上越市史』を活用し、現地調査しなければ獲得できない情報を整理することができる。	・調べてきた絵看板を選び、高田本町百年商店街のホームページや図書室で調べる。	記述		
5	○歴史博物館での調査により老舗商店が続いた高田の歴史を大観できる。	・高田の歴史を歴史博物館で調べる。 ・絵看板のある老舗商店への質問を考える。		記述	
6〜7	○絵看板のある老舗商店を調査できる。	・絵看板のある老舗商店の歴史について、聞き取り調査をする。			調査
8	○絵看板のある老舗商店の共通点や相違点を共有することができる。	・老舗商店の調査の内容を比較し、共通点や相違点を確認しながら交流する。 ・絵看板や高田本町に関連する歴史を年表にまとめる。		レポート	
9	○高田本町の歴史的な特徴に気付くことができる。	・江戸時代の城下町高田はどのようなところだったのかを考える。		記述	
10	○自分自身の考えの変容を自覚することができる。	・「高田本町の歴史について知っていることは何か」について、単元導入時と比較しながらまとめる。			振返り

(5) 本単元におけるパフォーマンス課題

① パフォーマンス課題の内容

城下町として栄えた高田は創業100年から400年以上の老舗店舗が30以上、軒を連ねています。高田本町では、商店街の活性化を目指す「高田本町百年商店街プロジェクト」として2018年から江戸時代に多くの商店で見られた絵看板を復活させる活動を行っています。「高田本町百年商店街プロジェクト」の絵看板には高田本町の歴史や地域の人々の想いが込められています。

しかし、高田本町の絵看板を見たことはあっても絵看板の背景に存在する歴史は、地域の人々にあまり周知されていません。また、歴史的な事実がはっきりしないことも多いです。

これまで小学校で歴史を学び、これから中学校で歴史を学ぶ皆さんだからこそ、高田本町の絵看板に隠された更なる歴史を発見できるのではないでしょうか。

そこで絵看板をきっかけに高田本町の成り立ちを調査することを通して、高田本町の歴史を深く理解し、高田本町の人々が知らない歴史を解き明かして提案してほしいです。

【課題に取り組む流れ】

1) 高田本町百年商店街に絵看板を探しに出かけます。
2) 高田本町百年商店街ホームページ「https://100nen.honcho.jp/」を参考にします。
3) 高田本町の絵看板を一つ選択し、調査計画（場所、内容、人）を作成します。
明治時代以前に生まれた店舗で現在も残っている店舗や地域の人について調査します。食べ物、建造物、衣服、街並み、無形（祭りや芸能）等は問いません。
4) 調査する内容については以下のA～Eの視点を入れ、各班で質問を考えます。
A その店舗はいつ、どのような理由で始まったのか（時期、年代、背景）。
B 絵看板に関する歴史で現在と同じところ、違うところは何か（継続、変化）。
C その店舗は、なぜ、変わらず続いているのか、なぜ、変わったのか（変化、原因、結果、影響）。
D 調査した歴史的な内容についての資料や根拠は何か（史実の検証）。
E これまで学んできた歴史的な事実との関連は何か（原因、結果、影響）。教科書の内容との関連。
5) 他の人の調べてきた内容を含めて、高田本町の歴史年表を作成します。
6) 高田本町の歴史的な特徴を資料に基づいてまとめ、発表します。

②ルーブリック

	A	B
知識・技能	絵看板という具体的な事柄との関わりの中で、高田本町の歴史について時期、年代、背景、継続、変化、原因、結果、影響などの視点で調べたり、収集した情報を年表にまとめたりする技能を身に付けた。	絵看板という具体的な事柄との関わりの中で、高田本町の歴史について調べたり、収集した情報を年表にまとめたりする技能を身に付けた。
思考・判断・表現	高田本町に残る文化財や諸資料を活用し、高田本町の歴史の時代背景や地域的な環境、歴史と私たちのつながりに着目して、高田本町の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察した。	歴史と私たちのつながりに着目して、高田本町の歴史的な特徴を多面的（地理、経済、交通、文化、政治、など）・多角的（生産者、消費者、町人、武士［士族］など）に考察した。

主体的に学習に取り組む態度	百年商店街の絵看板の成り立ちを追究することを通して、高田本町の歴史的な価値に気付き、主体的に追究した。	百年商店街の絵看板の成り立ちを追究することを通して、高田本町の歴史を主体的に追究した。

5　学びの実際（全10時間）

1時間目の導入で、「高田本町の歴史について知っていることは何か」を考えた。生徒の一人は「よく分からない。学校の授業や普段の生活であまり関わることがないから」と記述した。アンケートの「高田本町の課題は自分自身が考えるべき課題であると感じるか」についても、「とても感じる」と回答した生徒は21％（19人、n＝90）であった。そして、教師から、高田本町百年商店街周辺に出かけ、タブレット端末と地図を持って歩き回り、ワークシートに示された以下のようなミッションをできるだけ多く解決する高田本町オリエンテーリングの計画が発表された。

- 絵看板を30枚以上、発見する（写真撮影）。
- 創業100年以上の老舗に5つ以上行き、店の成り立ちなどについて話を聞く。
- 北国街道を歩き、北国街道を地図に着色する。
- 上越産の食材を使った料理を食べる（写真撮影）。
- ゴミを50個以上、拾う。　など

2、3時間目は、高田本町オリエンテーリングに出発した。仲間と相談しながらミッションを解決したり、歩き回ったりすることで「高田本町には歴史の長いお店がたくさんある」ことを知り、「班で話し合ったりすることで仲も深まった」ことを実感した（図1）。

オリエンテーリングの途中に高田本町百年商店街の店舗で昼食をとり、午後の活動への活力とした。

図1　高田本町百年商店街でミッションを解決する生徒

生徒は、オリエンテーリング後の振返りに以下のように記述した。

- 今日は、高田本町のことをもっと深く知るためにお店の人に成り立ちを聞いたり、ゴミを拾ったりした。高田本町のことを今までより深く知れたと思った。また、本町の方はとても優しい方ばかりなのだと実感した。インタビューにも優しく答えてくれたり、歴史的なものを見せてくれたりした。高田本町をよく使うので歴史を意識していきたい。
- 高田本町オリエンテーリングの活動を通して、今まで知らなかった高田本町のことを知ることができた。大杉屋惣兵衛で聞いたときにお店の話だけでなく、江戸時代のお馬出しのことや豪雪時の暮らしについても教えてくれた。昼食の天ぷら若杉では店主さんが話し掛けてくれるなど気に掛けてくれた。温かい人がたくさんいることも高田本町の魅力の一つなのかなと思った。

4時間目の導入では、教師から「絵看板の老舗商店をきっかけに高田本町の成り立ちを調査する」というパフォーマンス課題とルーブリックが提示された。オリエンテーリングで関心をもった老舗商店を一つ選択し、高田本町百年商店街のホームページを活用し、調べ学習を行った。大杉屋惣兵衛を調べた生徒は、「創業1592年であり、参勤交代で江戸まで伝わったこと、賑わった街道の地で当時の製法を守り続けていること」をワークシートに記述し、その歴史の深さに驚いた。片桐呉服店を調べた生徒は、「片桐家が武家の家系で300年続く旧家であること」が分かっ

たが、「片桐呉服店と片桐氏との関係は分からなかったのでもっと調べたい」と記述した。資料やインターネットから分かることと分からないことを確認しながら、老舗商店への質問を考えた。また、生徒の中から「高田本町だけでなく、高田全体の歴史が分からない」という声が上がった。そこで、次の時間に歴史博物館で高田全体の歴史を調査することになった。

5時間目は、歴史博物館へ出かけた。歴史博物館の常設展示「越後の都」を見て、400年以上前の高田の様子に関心を高めた。越後国の政治・経済の中心が春日山城から福島城、そして、高田城へと変遷したこと、徳川家康の命令によって高田城が造られたことや高田城下の街道の位置を展示物から捉えた（図2）。

歴史博物館への調査後、選択した老舗商店へのアポイントメントを取り、以下のような質問を考えた。

- 大杉屋惣兵衛はいつ（何時代に）、どのような理由で始まったのか。
- 絵看板の当時と同じところ、違うところは何か。
- 大杉屋惣兵衛が昔から変わったことは何か。
- 片桐呉服店の始まりはいつか。
- 片桐呉服店と高田との関わりは何か。
- 片桐呉服店が長く続いている理由は何か。など

6、7時間目は、高田本町商店街に出かけ、絵看板のある老舗商店への聞き取り調査を行った（図3）。仲間と分担して、タブレット端末で動画を撮影したり、考えてきた質問や追質問をしたりした。

図3の「肉のいろは」を調査した班は、「高田城がなくなった後、軍隊が入ってきたことで高田本町が発展し、『肉のいろは』自体が軍隊への食料供給を目的として創業したこと」に気付いた。調べた老舗商店の視点で高田本町の歴史に迫っていった。

生徒は、老舗商店への聞き取り調査後の振返りに以下のように記述した。

- 今日は待ちに待った本町への調査に行った。今まで大杉屋惣兵衛についてインターネットで調べてきたので、その調べたことが本当なのか、調べても分からなかったことについて質問させてもらった。聞き取り調査では、「430年前に創業しました」から始まり、参勤交代との関わり、上皇陛下がいらっしゃったことなど、最後は店舗の中を案内してもらいながら、話を聞かせてもらった。わざわざ僕たちのために、営業中なのに調査に協力していただき、この調査を基によいレポートを作りたいと思った。
- 今日は実際に片桐呉服店に行き、話を聞かせていただいた。お店の方が質問を予測して説明に必要な物を用意してくださり、親切だと感じた。片桐呉服店ができた当時の地図や仕事で使う家紋書を見せてもらい、分かりやすく説明してくれて有り難かった。

そして、課題として調べてきたことを基に老舗商店に関するレポートを作成した（図4）。

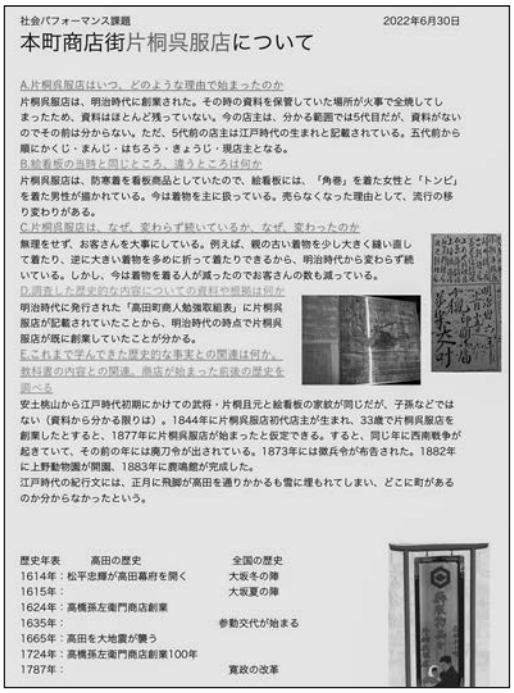
8時間目は、作成した老舗商店に関するレポートの内容を別の商店を調べてきた仲間のレポートと比較し、高田本町の老舗商店の共通点や相違

図2　歴史博物館で高田の歴史を調査する生徒

図3　老舗商店で聞き取り調査をする生徒

点を確認した。仲間の発表を聞いた生徒は、「高田が栄えた理由が高田城の開府と十三師団が来たことだと分かった」や「アリサカ理容室の絵看板に疑問をもっていたがかつては風呂屋だと聞いて『なるほど』と思った」といった仲間との交流を通して、他の老舗商店や絵看板について、もっていた疑問を解決した。このように仲間が作ったレポートのまとめ方や写真等の活用の仕方だけでなく、他の老舗商店の歴史についての知識を深めた。また、共通点や相違点について次のような内容をホワイトボードにまとめた。

【共通点】
・100年以上、続いている店舗が多い。
・地域の人や他地域の人に商品を供給している。
・代々、受け継いできた。3代以上、続いている。
・明治時代から大体、扱っているものが変わっている。
・城下町が人気だから、高田本町に店を建てた。
【相違点】
・江戸もしくは明治の創業である。


社会パフォーマンス課題　2022年6月30日

本町商店街片桐呉服店について

A.片桐呉服店はいつ、どのような理由で始まったのか
片桐呉服店は、明治時代に創業された。その時の資料を保管していた場所が火事で全焼してしまったため、資料はほとんど残っていない。今の店主は、分かる範囲では5代目だが、資料がないのでその前は分からない。ただ、5代前の店主は江戸時代の生まれと記載されている。五代前から順にかくじ・まんじ・はちろう・きょうじ・現店主となる。
B.絵看板の当時と同じところ、違うところは何か
片桐呉服店は、防寒着を看板商品としていたので、絵看板には、「角巻」を着た女性と「トンビ」を着た男性が描かれている。今は着物を主に扱っている。売らなくなった理由として、流行の移り変わりがある。
C.片桐呉服店は、なぜ、変わらず続いているか、なぜ、変わったのか
無理をせず、お客さんを大事にしている。例えば、親の古い着物を少し大きく縫い直して着たり、逆に大きい着物を多めに折って着たりできるから、明治時代から変わらず続いている。しかし、今は着物を着る人が減ったのでお客さんの数も減っている。
D.調査した歴史的な内容についての資料や根拠は何か
明治時代に発行された「高田町商人勉強取組表」に片桐呉服店が記載されていたことから、明治時代の時点で片桐呉服店が既に創業していたことが分かる。
E.これまで学んできた歴史的な事実との関連は何か。教科書の内容との関連。商店が始まった前後の歴史を調べる
安土桃山から江戸時代初期にかけての武将・片桐且元と絵看板の家紋が同じだが、子孫などではない（資料から分かる限りは）。1844年に片桐呉服店初代店主が生まれ、33歳で片桐呉服店を創業したとすると、1877年に片桐呉服店が始まったと仮定できる。すると、同じ年に西南戦争が起きていて、その前の年には廃刀令が出されている。1873年には徴兵令が布告された。1882年に上野動物園が開園、1883年に鹿鳴館が完成した。
江戸時代の紀行文には、正月に飛脚が高田を通りかかるも雪に埋もれてしまい、どこに町があるのか分からなかったという。

歴史年表	高田の歴史	全国の歴史
1614年：	松平忠輝が高田幕府を開く	大坂冬の陣
1615年：		大坂夏の陣
1624年：	高橋孫左衛門商店創業	
1635年：		参勤交代が始まる
1665年：	高田を大地震が襲う	
1724年：	高橋孫左衛門商店創業100年	
1787年：		寛政の改革

図４　老舗商店に関するレポート

・店舗を移転した、移転しない。
・史料がある、ない。
・同じ商売をしている店とそうでない店。
・高田藩との関わりと師団との関わり。　　など

生徒は、老舗商店の共通点や相違点の交流後、振返りに以下のように記述した。

・今日は、片桐呉服店、アリサカ理容室、杉田味噌屋、土田洋服店の共通点と相違点をまとめた。100年以上創業していることが共通点だった。代々受け継ぎ、100年以上創業できるのはとてもすごいことだと思った。相違点として、史料が残っている、残っていないというものがあった。私が調べた老舗商店は、史料は残っているが、いつの時代のものか分からないものがあった。100年以上経ってしまうと、流石に残っているところは少ないのかもしれない。
・今日は、レポートを仲間と交流した。その中で、ほかの老舗商店との相違点や共通点を見いだした。今まで高田本町という大きなくくりにしていたが、よく考えてみると違うところもいっぱいあることが分かった。

上記のように歴史的な史料の価値や各老舗商店の違いについて捉えた。

９時間目は、なぜ、城下町高田には多くの老舗商店が残っているのかを考えた。まず、現在も高田本町に残る職を確認した。肉屋、飴屋、蕎麦屋、呉服店、味噌屋、美容院といった職を答えた。

教師からアリサカ理容室、澤田そば屋、いわしや薬局といった老舗商店の共通点を聞かれ、「江戸時代に旅籠（旅館）だった」ことを確認した。追質問で「高田本町に旅籠は本当に多かったのか」を問われ、頭を抱えた。提示された『正徳２年高田各町記録』の上・中・下小町(本町4・５・６）に注目し、本当に旅籠が多かったことを確認した（下小町に旅籠30軒）。

「ほかに多い職はないか」を問われ、「信州問屋」が上・中・下小町にしかないことに気付いた。信州方面から送る雑貨や塩を扱うことができる信

州問屋の存在から高田本町と信州との関わりを捉えた（図5）。また、加賀藩の本陣があることから参勤交代の拠点であったことを確認した。

図5　仲間と歴史的な史料を読み込む生徒

『正徳2年高田各町記録』から捉えたことを基に「江戸時代の城下町高田はどのようなところだったのか」をグループで考えた。以下のような内容をホワイトボードにまとめ、発表した。

- 高田城を中心にした町づくりをしている。
- 信州問屋があったことから信州との関わりが深い。
- 旅籠が多かったことから、ものや人が集まる中心となるところだった。
- 他の地域との交流が盛んなところだった。
- 人がたくさんいて賑やかだった。
- 遠くから来る人が多かった。
- 他のところより繁盛していた。
- お店が多い。
- 高田の文化が栄えた。　など

そして、教師から「上・下職人町（大町）にはあまり老舗商店が残っていないのか」を問われ、史料から研師や鞘師といった武士のための職が多いことを確認した。追質問「なぜ、高田本町には多くの老舗商店が残っているのか」を6、7時間目の調査を基に考えた。多くの生徒が「明治時代に十三師団が入ってきたときに、軍隊にとって必要な職へと変化した」ことに気付いた。

生徒は、9時間目の振返りに以下のように記述した。

- 今日は、高田本町の歴史についてより深く学習した。高田の歴史は本当にあったのかが分かる歴史の資料を基に調べた。考えたよりも旅館が沢山あったり、その時の流行や、出来事に合わせてお店を変えたり、売るものに工夫をしていたりすることに気付いた。初めは何気なく調べるだけだったが、今は、とても興味をもって調べている。レポートに生かすのはもちろんだが、これからの生活にも生かしたいと思った。さらに、本町にはまだまだ知らない歴史がありそうなので、自主的に調べていきたい。
- 今日はなぜ、城下町高田には多くの老舗商店が残っているのかについて考えた。高田には旅籠屋や信州問屋などの他の地域と関わる仕事が多くあることが分かった。城下町には人が多くいて時代の変化に対応していったお店が残っている。城下町高田に多くの老舗商店が残っている理由は、高田城の城下町だったということで他県などから仕事や旅行でたくさんの人が行き来し、栄えていたからだと分かった。

10時間目は、「高田本町の歴史について知っていることは何か」を1時間目の記述と比較しながら、高田本町の歴史や文化について調査した内容を記述した。それを踏まえて、7時間目に作成したレポートを修正した。

6　研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本実践において、生徒はどのように変容したのだろうか。アンケートの「高田本町に魅力を感じるか」「高田本町に対して誇りを感じるか」について、多くの生徒が魅力や誇りを高めたことが分かる（実施日2022年7月8日）。また、表7のように地域の課題についての事実認識を高め、地域の課題を自分自身が考えるべき課題であると当事者意識を高めていることが分かる。

表６　高田本町に魅力を感じるか

	とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
前	42%（39）	43%（40）	14%（13）	1%（1）
後	57%（55）	34%（33）	7%（7）	1%（1）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

表７　高田本町に課題を感じるか

	とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
前	17%（16）	48%（45）	24%（23）	11%（10）
後	18%（17）	56%（54）	19%（18）	7%（7）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

表８　高田本町の課題は自分自身が考えるべき課題であると感じるか

	とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
前	21%（19）	46%（41）	23%（21）	10%（9）
後	34%（33）	42%（40）	15%（14）	9%（9）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

表９　高田本町に対して誇りを感じるか

	とても感じる	感じる	あまり感じない	全く感じない
前	40%（37）	34%（31）	24%（22）	2%（2）
後	48%（45）	36%（34）	14%（13）	2%（2）

表中の数値は左側がパーセント、（　）が人数。

抽出生徒のアンケートの記述は、次ページ（表10）のとおりである。

抽出生徒のアンケートを見ると、表６の項目では、高田本町を知り、「魅力を感じる」に変容したことが分かる。しかし、抽出生徒のアンケートの表７の項目では、「課題を感じるか」の記述が具体的な内容に変わっていることが分かる。表８、表９の項目では、選択肢については変化が見られない。このような当事者意識や誇りについてはあまり変化が見られないことから総合的な学習の時間との関わりの中で手立てを講じていきたい。

本単元の学習で、高田本町百年商店街の絵看板のある老舗商店の成り立ちを調べることを通して、老舗商店の歴史を知り、高田本町の歴史的な特徴や価値に気付き、主体的に追究していく生徒の姿があった。インターネットや書籍から分かる高田の歴史を調べていた。次に歴史博物館で調査することにより、高田の歴史の大きな流れを捉えていた。さらに、それでも分からなかったことについて絵看板のある老舗商店への聞き取り調査を行っていた。聞き取り調査では、老舗商店の方から文化財や諸資料を見せてもらったり、質問したりすることで内容についての理解を深めていた。そして、調べてきた内容について、年表を含むレポートにまとめていた。このレポートを他の老舗商店を調べてきた仲間と交流することで、高田本町の老舗商店の共通点や相違点を考察していった。これらの調査活動と歴史的な史料を読み深める活動を通して、高田本町の歴史的な特徴を捉える姿があった。

このような生徒の姿は、一次史料を自らが探し、歴史の本質を見極めていく歴史研究者が歴史を追究していく過程である。また、老舗商店の関係者に聞いても分からない歴史的な事実が多くあり、歴史が絶対的なものではないことを捉えていた。これは、教科書の内容を批判的に検討したり、深めたりする汎用的な見方・考え方でもある。加えて、老舗商店の人々と対話することを通して、そのような歴史的な事実が残っていること自体に価値があることを理解していた。このような生徒の姿から、本単元のねらいを達成できたと言える。

（2）今後の課題

本単元の課題として、分からなかった歴史的な事実をさらに追究する方法を考え、調べる活動を行っていないことが挙げられる。例えば、８時間目の振返りシートに生徒は「私が調べた老舗商店は、史料は残っているが、いつの時代のものか分からないものがあった。100年以上経ってしまうと、流石に残っているところは少ないのかもしれない」と記述していた。この記述から、分からないことに気付いているが、方法や場を設定していないことで追究しきれていないことが

表10　抽出生徒のアンケートに対する回答の変容

	表6　高田本町に魅力を感じるか（理由）	表7　高田本町に課題を感じるか（理由）	表8　高田本町の課題は自分自身が考えるべき課題であると感じるか（理由）	表9　高田本町に対して誇りを感じるか(理由)
生徒A 実践前	C：特にこれっていうものや建物がないから	B：高田本町にあんまり魅力を感じないから	B：課題と感じる	C：誇りに思うものがないから
実践後	B：様々な歴史やお店があるから	B：深い歴史や昔ながらのお店があること	B：高田本町の近くにいるから	C：特に理由はない。誇りを感じないから
生徒B 実践前	C：学校の学習や普段の生活であまり関わったことがないから	C：関わることが少なく分からないから	C：高田本町の課題がはっきりと出せていないから	C：自分の思う魅力や課題がはっきりと出せていないから
実践後	B：高田本町の老舗や歴史を調べてみてそう感じたから。古くからの歴史があり、地域の方が親切だったから	B：高田本町に実際に行ったときに賑わいがないなと思ったから	C：普段、関わることが少ないから自分ごととしてなかなか考えられないから	C：魅力はあると思うし、身近なところにあるが、自分ごととして考えられない。誇りをもっているかと言われるとあまりない
生徒C 実践前	C：高田本町のことをあまり知らないから	B：課題を感じる	C：課題をあまり感じない	A：誇りをとても感じる
実践後	A：たくさんの魅力を知った。昔からのお店がたくさんある	B：あんまり歴史が知られてないと思ったから	A：歴史を伝えたいから	A：昔からの歴史を守り続けているのがすごいと思ったから
生徒D 実践前	C：閉じているお店が多いから	B：閉まっているお店が多いから	C：できればいいところにしたいけど、今の年齢では、お店を再復活できないから	B：なぜかはわからないけど、いいところだなって感じるから
実践後	B：魅力的なお店が多い。お店の人がみんな優しい。歴史があるから	B：道がガタガタで、危ないなと思う箇所がある	C：表7で回答したように、私にどうにかできる問題じゃないから	B：とてもいい場所だし、本町全体で盛り上げているから（七夕まつりなど）
生徒E 実践前	C：本町を知らないから	C：本町を知らないから	C：本町を知らないから	C：本町を知らないから
実践後	B：総合で歴史などの話を聞きに行き、詳しいことを知ったから	B：若い人がいないから	B：高田に来る人が減っているから	B：様々な歴史があるから

A：とても感じる　B：感じる　C：あまり感じない　D：感じない

分かる。

このことから、分からなかった歴史的な事実を追究していくために、今後の歴史的分野の学習に地域史を取り上げる場を設定していきたい。

【参考文献・注】

[1] 北俊夫『「社会科の授業」はどう変わらなければならないか　「一匹の魚」より「魚のとり方」を』　明治図書出版　1997年　p.147

[2] 中野修一「中学校社会科教育における『身近な地域の歴史』学習の意義について−総合的な学習の時間との連携の重要性—」『神奈川大学心理・教育研究論集』第49号、2021年3月、p.156。中野は「現状の地域の歴史の調査学習は、中学校社会科歴史的分野の学習内容が多いためか、『身近な地域の歴史』の

学習に手が回らず、一つの単元として扱われることなく休業中の課題として扱われたり各時代の学習で関連ある事項として短時間で行われたりする場合が多いように思われる」と述べる。

[3] 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編』　東洋館出版社　2018年

[4] 岡田泰孝『政治的リテラシー育成に関する実践的研究　小学校社会科における内容・方法・評価のあり方』　東洋館出版社　2021年 pp.57-58

[5] 唐木清志『子どもの社会参加と社会科教育　日本型サービス・ラーニングの構想』　東洋館出版社　2008年